

# 淡雪

原民喜

青空文庫



潔が亡くなつてから彼是一年になる。露子は彼から感染うつされて居た病気がこの頃可也進んで行つた。早くから澄川病院に入院する様に父母を始めみんな勧めたが、潔のもと居た病院ではあるし、露子は気が進まなかつた。そんな風に病勢をずるずる引伸して行くうちに、寒に入つて凍てつくやうな日々が続いた。

ある日、露子は到頭咯血した。血の色を視ると、急に彼女は周章て出した。居ても立つても居られなく、母に継りついて、さめざめと泣いた。その日、父は早速郊外の松田病院へ出掛けて入院の交渉をして来た。父は珍しく菓子折を提げて歸つた。

「なあに、お前は潔とは違つて、晴やかな人間だ。陽気な人間なら、この病気は病気の方から今に降参して来るよ。」と父は云つたが、さう云ひながらも、彼女が菓子を欲しながらうともしない有様を見ると、一寸口に出せない別の感じを抱くのであつた。

夜になつてから露子は睡つかれなかつた。今日一日の経過が夢のやうに頭の裡に浮んで来る。これから先の不安と云つては、只住み慣れない病室に行かねばならぬと云ふこと位であつた。それも潔の室で大体想像のつくことであつた。だのに、どうも彼女はこれから

大きな船に乗って出かけて行くやうな気持がした。ほんとに、船の汽笛がポーと鳴る音を耳にするやうであった。波がキラキラ輝いてゐる夏の午後、彼女はうつとりと甲板の上に水着の儘寝転んでゐる、と船と自分とが一心同体になつて水の上を進んで行く。——かうした気持が暫くしてゐたかと思へば、また今朝ほど吐いた血の色が目映つた。紅い血の塊りが波の上に浮いて行く。彼女は何時の間にか、自分が吐いた血の色に見惚れてゐるのである。「これはをかしい」と彼女は呟いた。あれ程彼女を驚かせた血塊が、今は美しいと感じられるとはどうしたものだらう。何だか彼女は少女の頃の感傷にかへつて居た。私はどうせ波の上に漾ふ一片の花瓣のやうなものです、さう小声で私るやうに胸のなかで囁くと、思はず閉ぢてゐた目に涙が滲んだ。

朝になる頃、彼女は変な夢をみた。潔が彼女の手を執つて、唇に押しあてるので、彼女は片方の指で自分の唇を示すと、潔は首を振る。「何故？」と尋ねると、「今にわかります。」と潔の声は慄へてゐる。「何故？ 何故？」と彼女は潔に甘えかかつて、到頭彼の首に手を廻す、さうして接吻を了つてしまふと、やはり何でもなかつたので彼女は晴やかに笑ひこける、潔も淋しさうに笑ひ出す。

夢が覚めてから少許はただ爽やかな気持で居たが、ふと彼女はこの夢が気になり出した、

さうして終にはこの夢が恐しくなつて来た。

露子が松田病院に入院してから一ヶ月は経過した。彼女はすっかり瘠せ衰へて、病人らしくなつた顔に、淋しい笑みを浮べるのであつた。入院して却つて悪くなるとは、と見舞に来る人は首を振つた。医者もこの問ひに対しては答へやうがなかつた。彼女は医者命ずる事なら何でもよく諾いてゐた。病室の空気にも彼女はすっかり馴れてゐるらしかつた。消毒剤の匂ひも、注射器も、体温表も、何から何まで以前潔の室で見識つてゐた通りであつた。

時とすると、彼女はベットのの上に寝転びながら、その隣りにもう一つ潔のベットがあるやうな心地がした。肺病める夫婦、そんな風な想像から彼女は好んで悩しい甘美な感情を味つた。

ある日も彼女は隣りのベットに対つてかう呼びかけた。

—— 潔さん、あなたは嘗て私に恋の喜びを与へて下さいました。そして間もなくあなたは私を置き去りにして逝つてしまひました。どうもあなたは態と逝つてしまはれた様な気がします。あなたは私が愛しくなかつたのですか。どうかよくなって下さいと私が熱心に云つても、あなたはただぼんやりと淋しげに微笑みなされました。私はあなたのその頃の

気持が、何と云つていいのか解りませんでした。ただ、私はあなたを亡くしたことを恨みました。

しかし、潔さん、この頃私はやつと当時のあなたの気持が解つて来たのです。潔さん、あなたの病気が今は私のものとなつた様に、あなたの気持も今は私のものとなりました。ええ、あなたは病気を媿しんでゐらつしやつた。あなたは病気を弄んでゐられた、あなたは自分の力を信じられないので、ただ熱が出て頭が冴えて来れば、それを面白がつてゐられたのでせう。あなたの淋しい靈魂には、肉体が刻々と蝕まれて行くことが、却つて不思議な美しい誘惑ではなかつたのでせうか。さうして、この誘惑を到頭あなたは私にもお頷ちになりました。ああ、何と云ふ恐しい誘惑でせう。しかも私はもう動けないのです。あなたは優しく、優しく手を伸べて私を抱かうとするのですか。（彼女はちつと天井を視凝めて居たが、ふと急に怖くなつた。）いいえ、あなたは、あなたなんか居はない。

さう呟きながら窓の方へ寝返りをした。窓の外には何時の間にか淡雪がちらついてゐた。彼女は嘗て潔の病室を訪れたとき、やはり淡雪が降つてゐたことを憶ひ出した。今日は誰か見舞に来て呉れさうな日だと思はれた。ちつと、廊下の方の足音に注意しながら、何時

までも何時までも窓の雪を視凝めてゐた。彼女は誰がやって来るだらうかと一心に想像し出した。と、急にドアをひらいて潔が現れて来るやうな気持がするのであった。





# 青空文庫情報

底本：「普及版 原民喜全集第一巻」芳賀書店

1966（昭和41）年2月15日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：蔣龍

校正：伊藤時也

2013年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 淡雪

原民喜

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>